HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	*A man died from India.の非文性について
Author(s)	葛西, 清蔵
Citation	北海道大學文學部紀要, 43(3), 1-13
Issue Date	1995-03-30
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/33648
Type	bulletin (article)
File Information	43(3)_PL1-13.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北大文学部紀要 43-3 (1995)

*A man died from India. の非文性について

葛 西 清 蔵

0．表題の文は，A man from India died. の主語 a man from India から from India を抜出し，文尾に移動させるという方法で説明される。本稿は，Takami (1993) のような「重要な情報」(more/less important information) という観点から説明するか，または，Nakajima (1993) のように，「関連性」(relevance) の観点から説明するかの二つの説明法について検討する。この二つの方法は，一見まったく別の方法のようにみえる。しかし，考えてみると，表題の文は「なにを伝えようとしているのかがはっきりしていなくてはいけない」という点では両者の主張は共通しており，「発話では異なった二つ以上のことをいうことはできない」ということから説明できることを主張しようとするものである。

1．1　Takami (1993) の主張を概観しよう。

1.a　Who walked into the building?
　b　Into the building walked John.
2.a　Where did John walk?
　b　*Into the building walked John.

1.a で求められる情報は who に対する答えであり，1.b では，それに対する答え John が新情報のくるべき文尾にある。一方，2.a では，where に対する答えが求められているが，2.b では，その答えであり，新情報である into the building が新しい情報が来るべき文尾ではなく文頭にあるため非文と

なっている。このことから，Takami (1993) は，つぎの3．を提案する。

3．More/less Important Information Condition on Rightward Movement: A sentence involving rightward movement is acceptable if and only if the rightward-moved constituent is interpreted as being more important than the rest of the sentence.

3．の条件によれば，表題の文で，from India が最も重要な情報をになっていることになる。しかし，この文で，die は一般の人にとってはめったにおこることのないことである，つまり，重要な情報を伝えているはずである。このため，表題の文では，もともと重要であるはずの died のあとに，さらに from India という表現が重要なものとして文尾におかれたために，これらが衝突して，どちらが聞き手に伝えようとする重要な情報なのかわからないために非文をつくったということになる。

この考えは正当性のあるものと思われる。これは，つぎに文によっても証明される。

4.a Many soldiers were killed in the war from Germany and Japan.
 b Many patients died in the hospital who had been infected with malaria.

soldiers にとって killed, patients にとって die は予想されることだから，killed, died はそれほど重要な情報をつたえているとは考えにくい。したがって，重要な情報になっている from Germany 以下，who 以下とは全体として衝突がなくよい文となっている。

1．2 これに対し，Nakajima (1993) は，5．6．によって Takami とはちがう説明をする。

5.a *A man died with blue eyes.
   b A man will die with malignant tumors.
6.a *A man was arrested with a hairband.
   b A man was arrested with lots of drugs.

5.a が非文であるのに対して 5.b が許容されるが，それは Takami のいうように，情報の重要さ問題ではなく，たとえば，5.b では，die と with malignant tumors の間に意味上の関連性（relevance）があるからだという。

もともと，この「関連性」は，Grice (1967, 1975) の「協調の原則」(cooperative principle) の一つで，情報伝達が効果的に進むためには，会話の参与者がお互いに守るべき格律として，「相手の話に関係のないことをいってはいけない」，つまり相手の話に関連性が必要であることをいったものである。これを，Sperber/Wilson（1986：122）は，もっと一般化して 7. のようにまとめた。

7. Relevance: an assumption is relevant in a context if and only if it has some contextual effect in that context.

ここでは，会話のなかで話し手のまもるべきこととして「関連性」があるのではなく，一つの文脈のなかのこととしてより一般的な形で考えられている。6.a で，arrested と with a hairband とは関連性がなく，6.b では，arrested と with malignant tumors が関連性があるから許容されるという。（したがって，もし hairband をすることが arrest されるような文脈をあたえるか，drug をもっていても arrest されないような社会では，それぞれの文の判断は逆になる。）

以下では「情報の重要さ」と「関連性」は対立するものなのか，重なる面をもつのか，同じものの二つの側面なのか考えてみることにする。

2. Takami (1992) が表題の文を「情報の重要さ」で説明しようとし，表題の文のもつ die の重要さと文尾に移動された from India の重要さが衝突し

て非文になるとするが，これは別のもっと一般的な現象にもみられる。

8.a A man who was wearing very funny clothes came in, *wasn't he/didn't he?

b A man just came in who was wearing very funny clothes, wasn't he/*didn't he?

付加疑問はもともと主張の部分にかかるものであるから，8.a では，文尾の came in，8.b では，who 以下が主張になっていることがわかる。これをふまえつぎの例をみよう。

9.a A man just left who was wearing a hat.

b ?*The* man just left who was wearing a hat.

c ??*That* man just left who was wearing a hat.

d **John's* brother just left who was wearing a hat. Grosu (1972)

9.a，b，c，d において，who 以下は主張である。b，c，d にみられるような許容度の段階は，斜体部分のちがい，つまり主語がどの程度に「特定的(specific)」であるか，と平行する。この「特定的」であることが，a man よりも情報を多くもつために，これが文尾の主張部分と衝突をおこして非文をつくると思われる。もう一種類の例をみよう。

10.a A book by Chomsky delighted *Mary*.

b *A book delighted *Mary* by Chomsky.

11.a A book by Chomsky arrived *late*.

b *A book arrived *late* by Chomsky.

10.a, 11.a の文では，それぞれ Mary, late が重要な情報(cf. 'more important information' Takami 1990：203）となっている。それに by Chomsky

という新たな重要な情報が文尾に移動してきたために，10.b では，Mary と by Chomsky，11.b では，late と by Chomsky が衝突をおこして非文をつくっている。[1]（これらに関する一連の議論は葛西（1992）にゆずる。）ここからは，

12．一つの文のなかには，二つ以上の主張，情報のゆたかな部分があってはならない。（葛西　1992：64）

を導きだせるであろう。以上みてきたように，「情報の重要さ」という観点はきわめて一般性のある説明方法であるといえる。

3．つぎに，Nakajima（1993）を検討するが，便宜上 4．であげた Takami（1993）の文をもう一度みながらすすめる。

9.a　Many soldiers were killed in the war from Germany and Japan.
　b　Many patients died in the hopstal who had been infected with malaria.

Takami が，soldiers にとって killed，patients にとって died は予想されることであって，killed, died はここでは重要な情報をつたえていないというとき，まったく同じこの箇所は別のことをもいっている。すなわち，soldiers と killed，patients と died，さらにいえば，soldiers-killed-in the war, patients-died-in the hopital という要素のつながりは，意味的にきわめて「自然なつながり」であって無理がない。よくみられる「普通のつながり」といってよい。だからこそ，そこには，「重要な情報」がそれぞれ衝突するしあうことがない。（The sun shines. はなんらかの形で，どこかをマークしないかぎり，許される文とはなりにくいであろう。たとえば，sun にストレスをかけるとか，shines に bright をつけるとかすればその部分が情報ゆたかになり，主張となる。）そのために，文尾の from 以下，who 以下の「重要な情報」と衝

突せず，全体として許容される文となるのである。無理のないつながり，よくみられるつながり，これが情報がすくないつながりでもある。

ところで，うえでみた「自然なつながり」こそはまさしく，Nakajima のいう「関連性」といえる。5.b の die と with malignant tumors，6.b の arrested と lots of drugs は，動詞と移動された前置詞句との意味上の「関連性」であるが，9.a では，主語と動詞（その修飾語）の間の「関連性」である。Wilson/Sperber（1992：134）は，

13. Other things being equal, the smaller the processing effort, the greater the relevance.

つまり，「処理努力が少なくてすむところほど，関連性がつよい」という。ここでいう「より少ない処理努力（the smaller processing effort）」とは，まさしく要素の「自然なつながり」以外のなにものでもない。Deane（1988：105）は，'Low processing cost increases relevance' と明解であり，かつ，low processing cost のものは predictable であるという。predictable とは，「自然なつながり」のことである。Nakajima のいう「関連性」とは，処理努力が少なくてすむ，要素のつながりのことであり，処理努力の少なくてすむつながりとは，自然な，ごく普通にみられるつながりのことである。

4．Takami，Nakajima の主張するところをみてきたが，Takami の「情報の重要性」は，その文の要素どうしのつながりの自然さに密接に関係し，この「自然なつながり」は実は，Nakajima の「関連性」そのものであることをのべた。以下，このことを確認したい。

Takami の論文には，'common'，'frequent' のような表現がよくつかわれる。(2) たとえば，

14.a Which party did John write the letter [after t] ?

b ??/*Which party idid John bury the leter [after t]?

14.a, b の許容度のちがいは, writing a letter が, 'common everyday action' であるが, bury a letter はそうではないことによる (Takami 1992：31) としている。(3) また,

16.a *How *fresh* did you *drink* the milk?
b How *fresh* can you *buy* fish at Legal Sea Foods?
17.a *How *flat* did you *drink* the beer?
b How *flat* did John *hammer* the metal? Kuno/Takami (1992: 58)

16.a の 'drink...fresh' は, 'not a common expression' であるが, 'buy... fresh' は, 'a common expression' であるし, 17.a の'drink...flat' は 'very infrequent' であり, 'hammer...flat' は, 'much more frequent' であるという。16, 17 の文において, 許容されるかどうかは, 統語上の問題ではなく, それぞれの語のつながり方が, common, frequent であるかどうかによるのである。これは, 統語上の問題でない以上, common, frequent とは, 意味上の問題であるはずである。語のつながり方が意味的に common, frequent であるということは, それらの語の間にふかい「関連性」があるということになるだろう。意味的に「関連性」のない語のつながりが, common であり, frequent であるはずがない。(4) (もっとも, Takami は, common, frequent なものが, 許容度がたかくなるとはいうが, その理由についてはなにものべていない。)

すでに 13.b で, 文を「処理する努力」を必要としないものほど「関連性」があることをみた。この「関連性」の側から, つぎのような例をみることにしよう。

16.a Peter bought a paper before leaving.
b Peter purchased a newspaper prior to departure.

Wilson/Sperber (1992：147) は，16.a，b について，a の方が，b よりも処理しやすいとし，その理由を 'one factor known to affect processing effort is the *frequency* with which words are used' (斜体筆者) とその理由をのべる。ここではっきり frequency が，処理努力と関わることをのべている。Takami も，Nakajima も frequency という言葉を共通に使用している。それで，つぎのようにいうことができる。

17. Takami の「情報の重要さ」という考えは，common，frequent を仲介にして，Nakajima の「関連性」とつながっている。

5. 以上みてきたように，「情報の重要さ」，「関連性」は，common，frequent をキーワードとして，8. でみたように，「一つの文のなかに，衝突をおこすような，複数の「重要な情報」があってはならない」ことの側面をのべたものだといってよい。さらにいえば，発話というものが，もともと，話し手がある意図をもってするものである以上，そのなかにでてくる要素間に意味的な関連性があるのは当然であり，問題はむしろ，この「関連性」と「情報の重要さ」との関係のしかたである。

Nakajima が，「関連性」のある要素であれば文尾に移動できる，とするとき，それは移動された要素と，動詞の間のことであった。die with blue eyes よりも，die with malignant tumors の方が，また，arrested with a hairband より，arrested with lots of drugs の方が要素間の関連性が深いので，処理しやすいということになる。A man died with malignant tumors. が許容されるというとき，移動された要素に機能的な変化はないのであろうか。移動前は主語名詞の修飾語であったはずのものが，移動後は動詞とのつながり(「語順の圧力」(pressure of wor-order pattern)) で，副詞的な要素として解されるように強いられているのだろう。

いずれにせよ，A man died with malignant tumors. が許容されるのは，died と malignant tumors が，処理しやすい自然なつながりであることが，理由のひとつであることにはまちがいがないであろう。しかし，さらにいえ

ば，malignant tumors が，文尾にくるに値するほど，この文のなかで重要な意味を担わされていたことも事実である。A man died. はいかにも情報不足な文であろう。(cf. The sun shines.) A man with maligant tumors died. では，died が焦点であるはずである。そこで，malignant tumors を文尾に移動すると，died と関連をもつために，died は malignant tumors にたいして，相対的に defocus される。(cf. 動詞の意味が希薄になる点については，福地 1985：103) そこで，died と malignant tumors は衝突しないで，許容される文になる。それにたいして，died with blue eyes は，died と blue eyes が，意味上の関連性がないので，died が焦点のままで，相対的に defocus されることがなく，文尾の blue eyes と衝突することになる。これが，*A man died with blue eyes. と A man died with malignant tumors. をわける理由ということになろう。

最後に，すでにみてきた説明を支持すると思われる点をつけくわえる。

19. *Did* John *cleverly* stop smoking?

20.a *Bob is *happy* enough to be *short*.

b *John is *angry* enough to be *tall*.

c Mary is *pretty* to *look at*./*to *work with*.

19 の文は，John stopped smoking. を前提にして，それが clever であったかをきいているのか，John stopped smoking. に対して，yes/no 疑問をはっしているのか，わからない。これが非文の理由である。Bellert は「同一の文のなかで，質問し，かつ命題を「主張」することはできない」(Bellert 1977：34)という。20.a, b について，Wilkinson(1976：161)は，二つの述語(happy/short, angry/tall)は，「同じ，ないしは関係ある意味の場(the same or related fields) に属するものでなければならない」という。関連のある，自然なつながりであれば，意味的にもまとまった単位をなし，知覚しやすいく (Grosu 1982：64)，許容できる文をつくるが，そうでないと，知覚の混乱(conceptual confusion) (Cattel 1976：32：note 8) をおこし，非文をつくってしまう。

「一度に二つ以上のことをのべてはならない」という制約（Bolinger 1979：102）もある。一つの発話には，かならず一つの述べたい主張の部分はあるはずであるが，それ以上あると，発話の意図がぼけてしまい発話そのものが，成立しなくなってしまう。発話時において，話し手の意図，気持ちのもちかた（心的態度）は一つになっていなくてはならないのである。Takami, Nakajima の主張は，これをめぐって，おなじことの二つの側面を違った方向からのべたものといえる。Takami は，文全体の情報構造についてのべており，Nakajima は，文のなかの要素の意味的なつながりについてのべており，両者は対立するものではない。

Notes

(1)　この種のことは，つぎのような文とも関連する。

i .a　A man spoke from India.

b　*A man spoke *English* from India.

c　*A man spoke *softly* from India.　　Guéron(1980: 664)

ii .a　I gave John *a* picture of himself.

b　?I gave John *that* picture of himself.

c　*I gave John *Mary's* picture of himself.

d　**I gave John *Mary's sister's daughter's* picture of himself.

iii .a　Fred *announced／told／reported* to me that Bess will certainly marry, but it is not at all certain.

b　?Fred *exclaimed／yelled*....

c　*Fred *snarled／lisped*....

iv .a　A man *came* in with blue eyes.

b　*A man *was coming* in with blue eyes.　　Rochemont(1985: 27)

(2)　Takami（1992：66）では，'tightly connected or associated' という表現をつかっているが，おなじことであろう。そのほか同じ主旨で，'close association'　Bolinger（1972：113），'something to do with'　Gundel（1998：81），'fit in'　Cattel（1976：28）などもみられる。さらに，Siegel（1983：186）

が,

i .a *What time did they leave [$_{pp}$ after e]

b Which parent does she take [$_{pp}$ after e]

について, take after は, resemble と等しい意味単位 (a semantic unit) をなしている, というのも結局は, 'frequent, common' なつながりであるということであろう。

(3) Deane (1988：102) は,

i .a Who did John take a picture of?

b *Who did John destroy a picture of?

について, 'The crucial difference seems to be whether the verb's meaning naturally focuses attention on the NP to be extracted?' といっており, 'surprising combination' は 'not predictable' だという。つまり, 不自然なつながりは予測しがたい, というのである。さらに, Erteschik-Shir (1981：667) は, i .b の destroy について, destroy の意味は dominant であり, その場合, i .b のような抜出しは不可能だという言い方をしている。Erteschik-Shir/Lappin (1979：71) は,「島」からの「抜き出し」について, 'the more unusual the matrix verb, the less easy extraction is' とはっきり 'unusual' (普通でない) ということばをつかっている。

cf. Ogle (1981：129) は,

i *I was surprised that the remaining strawberries John ate.

ii I was surprised that the remaining strawberries John THREW IN THE GARBAGE.

i, ii でみるように, 'less predictable collocation' では許容されるようになるとのべている。

(4) Cattel (1976：40) が,

i .a It is possible to buy a book about that composer.

b *It is possible to burn a book about that composer.

について, 'what the book about seems *relevant* to the question of whether it is possible to buy one or not' (斜体引用者) にはっきり「自然

なつながり」と「関連性」の関係をよみとることができる。

References

Bellert, L. (1977) "On semantic and distributional properties of sentential adverbs" *LI* 8-2: 337～351

Bolinger, D. (1972) "*What did John keep the car that was in?" *LI* 3: 103～115

Cattel, R. (1976) "Constraits on movement rules" *Lg*.52-1: 18～50

Deane, P. D. (1988) "Which NPs are there universal possibilities for extraction from?" *CLS* 24: 100～111

Erteschik-Shir, N. (1981) "More on extractability from quasi-NPs" *LI* 12: 665～670

——/Lappin, S. (1979) "Dominance and the functional explanation of island phenomenon" *Theoretical Linguistics* 6: 41～86

福地肇(1985)『談話の構造』大修館

Grice, H. P. (1975) "Logic and conversation" *Syntax and Semantics* 3 Academic Press

Grosu, A. (1972) "The strategic content of island constraint" *Working Papers in Linguistics* 13 Ohio State Univ.

————(1982) "The extragrammatical content of certain "island constraints"" *Theoretical Linguistics* 9-1: 17～67

Guéron, J. (1980) "On the syntax and semantics of PP extraposition" *LI* 11-4: 637～678

Gundel, J. K. (1988) *The Role of Topic and Comment in Linguistic Theory* Garland

Huck, G. J./Na, Y. (1990) "Extraposition and focus" *Lg*.66-1: 51～77

葛西清蔵(1992)「いわゆる「指定主語条件」について」『函館英文学』31：61～69

————(1994)「心的態度の一貫性とその表現について」『北大文学部紀要』42－2：81～109

Kuno, S./Takami, K. (1992) *Functional Syntax and GB Theory* ms.

Nakajima, H. (1993) "Extaposition and relevance" ms.

Ogle, R. (1981) "Redefining the scope of root transformations" *Linguistics* 19: 119～146

Quirk et al. (1972) *A Grammar of Contemporary English* Longman

Rochemont, M. S. (1985) *The Theory of Stylistic Rules in English* Garland

Siegel, M. E. A. (1983) "Problems in preposition standing" *LI* 14-1: 184～188

Sperber, D./Wilson, D. (1986) *Relevance: Communication and Cognition* Blackwell Pub.

————————(1987) "Precis of relevance: communication and cognition: *Behavioral and Brain Science* 10: 697～754

Takami. K. (1990) "Remarks on exrtraposition from NP" *LA* 20-3/4: 192～219

————(1992) *Presposition Stranding* Mouton

————(1993) "A functional constraint on rightward movement" ms.

Van Valin, R. D. Jr. (1982) "A typology of syntactic relations in clause linkage" *BLS* 10: 542〜558

Wilkinson, R. W. (1976) "Modes of predication and implied adverbial complements" *FL* 14: 153〜194

Wilson, D./Sperber, D. (1992) "An outline of relevance theory" *Current Approach to English Linguistics* (eds.) Konishi, T. et al. The Eichosha Ltd.